

春日部市保健衛生センターの後方にあり、大きな松の木がある神社を三郎谷稻荷という。

社の左側に鉄柵で囲われた中に碑がある。この中の大きい碑の上部に「三郎谷の碑」と記された高さ一・三五以、幅一以の自然石の碑がある。この碑は、やはらしんでん谷原新田開発の歴史を後世に伝えるため、天保四年（一八三三年）に東谷原の三郎谷稻荷社の境内に建てられたものである。

谷原新田は、むかし谷原沼と呼ばれた沼沢地であった。寛文九年（一六六九年）、東谷原の高田三郎が西谷原の中村重政とともに幕府にこの地の開発のことについて訴えたので、幕府は老中稲葉伊予守を派遣して耕地数百町歩の新田開発を施行した。

開発当初は雑草がはびこり、満足な収穫を得ることができなかつた。しかし幕府の年貢割付は厳しく、二人は村人の窮状を考え年貢の納入について苦慮した。西谷原の中村重政は、やむなく和泉国日根郡生垣村熊取（大阪府泉南郡熊取村大字小垣内）の生家におもむき、事情を述べて融資を受けその責を果たしたが、東谷原の高田三郎は幕府の命にそむきその責が果たせなかつたので処罰（所払い）され、東谷原を去つた。

しかし、谷原新田開発の功は偉大なものである。その功も空しく去つた高田三郎に対して、村人の心には尊敬と愛惜の情は消えず、百六十四年後の天保四年にこの碑が建てられたのである。なお、高田三郎の遺徳が今日に至るも語り継がれ、この境内につぎのような遺跡が残されている。

一石祠 高美神（弘化三年四月）

二高田宮水田移管の碑（昭和五・三・十）

三高田三郎所有地変革の碑（昭和四十年七月）

前述の「三郎谷の碑」の碑文は漢文で、しかも異体文字、旧字がたくさん使用されたためらしいものである。

碑文を解説要約すると、つぎのとおりである。

表面

東の方岩築城を距つること一里の所を谷原邑むらといふ。この昔寛文巳酉（九年）東都の人高田三郎・中邨重政むら、俱に県官（代官）に乞いて以て開拓せし所なり。当村の有司ゆうし、その地を二分して一は以て牧地となし、二は則ちすなわ以て二子に賜ひたり。故に今も東西を以て之を称するなり三郎は東邑に處りお、重政は西邑に處り各々草々の功を以てその邑人を支配せり。人民聚落じゅらくして今に至るまで其の賜を受くるなり。呂覽ろらん（呂氏春秋という中国の古書物名）に曰く「民は賢に従う」と。二子の如きはあに賢といはざるべけんや。のち三郎故あつて東邑を去り、終にその卒する所を知らざるなり。今東邑に三郎谷と称するものはすなはちこれ三郎の旧地なり。このごろ東邑の長、平君美たいらのきみよしその項ありて後無きをあわれみ、西邑の長、藤在義ふじのありよしと謀りまさに碑をその地に建てて以てこれを表せんとしすなわち富子ふうし（有力者）を介して、はるかに予に文を請ふ。それ事は世をむなしゆして相感じ或はその人を待ちてしかる後あらわ

る（その人の功を認めてくれる人があらわれ）。故に身は美しい宝玉をいだけども名はあるいは煙滅して称せられず、これ史遷の歎ずるところなり、而して今吾この拳に感ずるところあり。

よってその事を叙して刻む。

天保四癸巳年五月 岩築 潜龍親順撰 粕壁 次郎兵衛書 野口通衛 刻

裏面に

碑に所謂平君美とは、その先祖を義将といい、天和元年代官は義将を東邑の長に命ぜしは、けだし三郎がその邑を去りしが故なり。君美に至るまで世世その職（名主）を継ぎしなり。君美は七世の孫なり。易に曰く「積善の家には必ず餘慶あり」と。義将の行う事は概ね見るべし。

碑成りし後、また邑人のもとめに応じて君美の為に記すこと斯くの如し。

下段に当時の名主・村役の人達の氏名が刻まれている。

谷原新田の開発は農業史に大きな足跡を残した。その中で高田三郎の遺徳を偲び三郎谷の地名が今も残されている理由がうなずける。